

231
69
5

準貴

百人一首古説

四

百人一首古説卷

藤原實方朝臣

かゝるふえやきいあとのうもまらけりなむもあはれ
後拾遺集 志 女まらけりなむもあはれ
始ていひけりなむもあはれ
うらむのけりなむもあはれ
らんけりなむもあはれ
おひのほとけりなむもあはれ
おふもけりなむもあはれ
書不盡志言不盡意とふ如く深



拾遺集
まらけりなむもあはれ
うらむのけりなむもあはれ
らんけりなむもあはれ
おひのほとけりなむもあはれ
おふもけりなむもあはれ
書不盡志言不盡意とふ如く深

情の切なる花とて世に花物

こえやいこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

い花いこきとてあまをうりい河ぶらて

享和日七年之病末二年之艾草名

譜

祖父小一條左大臣師尹父大納

言左大將濟時卿兼右衛門督又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

臣ハ左兵衛佐寛和三年六月又中將兼右

しるゝと記さしきし 其子の能きとてい
初年の上のふてをいふき ちよとてかりの
実とよみしはしきてりさしきりやと
其子のゆきて 記録をよといふるされ
さくらや 且に位階を人 玉冠と稱もあつ
らしきとけ人の振に在あるゆき
なり 又 枕草子 葉花 物流等いん
せいの流を 時又名ある人のかくあられ
し波かれのゆきの又きぬしおさ
しきしきしきしきしきしきしきしきしき
まはりのまはりと 湯とあつさるる

藤原道・伝朝也

明の世にわたりておるる 歌と先文の記す

後拾遺集 恋女のまじり 雪のうら

ゆるりる日つらて けうりしるる

かつさねわいおるるねこころふゆふきのあをき

け次ふ今の今ねん入らりもしちの雪の

ふいたの音よいひて次よふせいしきさよ

の明の世にわたりて 善ぬばく善ぶらわら

なるまよしきり 初なるるるまよふせいしき

改
新編
諸
記
也
道
兼
流
一

ちのゆらんかしらぬまより
わしはせんし交ねとらあとし人
乃れくひしほ撰りあまみうけ
らしそそきくほしえしきし
あまのききとあまのききと
あまのききとあまのききと

譜

祀父九條右大臣

師神云

父恒徳云

恒徳云

也

兼記
兼記
兼記
兼記

西本内閣
白

流

権中細言道徳君いみじき和文

のよきとく人いふこと

右大将道細母

形をばつゆのたの明るまふ久ふおとく

拾遺集 入道 松政 権家 内りり

ゆりり 門の切きあけられん
ぬとひ入てゆりれいみみて
門ひりく同いあしとてきうつひ
まよも君あおをまねは
独めるはよのゆりるをい
久

久

つるのふとあふーとくわとこし生ぬおのは
よのねいゆもするのほいてよのるきたるこ
晴蛉日記よけひ

いふやくしそのおぬらぬ^{不後}ふまのを^おお^はく^りめ^りい^づり^いづ^り
同日日記よ十月 晴^りるよよ之夜とさうて
んそのぬ時ありき二三日をりありて曉も
ふいとあく時ありきいば^て先^て寝^れあ^る
いと^りして^いあ^らひ^て お^ひひ^て さ^らに^いづ^しづ^め
のるぬるー ^まい^らり^いづ^しづ^め ^ひひ^て ^まま^に
らい^くる^まさ^うさ^うあり^とき ^おい^しと^わく^こそ^か
らう^らう^れれ^らう^らい^い ^おい^しと^わく^こそ^か
^らう^らう^れれ^らう^らい^い ^おい^しと^わく^こそ^か

あさりのあふぬとそめさるふ人てい拾遺
葉の河をいづらばよてかーいさおあき
てあやかし^しはえあ^らせ^ん ^や曲^はさ^るる
のや^もと^れい^さう^らい^まれ^い ^あは^つら^るふ^ら
とつて多ー ^いけ^から^うー ^時と^指遣^葉の^時
い^しと^わく^こそ^かと^指遣^まい^人の^長文^のま^にに^まる^ら
う^らう^らー ^いけ^から^う ^いけ^から^う ^いけ^から^う ^いけ^から^う

譜

道綱郷父系二條拾政也^唯家道綱々長徳二
年任右大将同三年大納言也係
之^年叙^正二位寛仁四年薨^母正
四位下藤原侔^宰女^子
^乙々^補住^正元^乙
^大後^乙々^乙の^如

引て足踏交ちる 大後云 清母ハ道徳の事極むる
備享としるせり
日記にも
方のよまふおりしれハけ及瑞家の道し
まひらふふとのるゆきとちゆつ先て
蛭
日記と名付てま

後園三司ノ母

ついでしどの切末まそいざいれらあけ跟らの名も
新古今集恋 中園如道徳ゆま
先竹り いろは
かぶらと先ある程のふとふふ末終く

あせしこののあいかせともれちまうけそ
るののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ

のあせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ
あせしこののあいかせともれちまうけそ

ししてるるを

に後指送集 赤原ちあ

あまねくいふるを多しけりぬるはあはるるを

そ今く日しに白紙く切末まてり

としかるいはるかのうかある

ものこ日しるあそとけりか

うきあふのゆをそ

譜

儀同三司伊周公父中興自也道隆

伊周公三曆三年十九歳任権大

納言正三位同五年越大将任内

大臣長徳二年坐事為大宰

権師同三年召歸京寛弘二年

勅列大臣下大納言上同五年准

大臣給封千戸同七年薨七十自号

儀同三司諸記母後二位高階真

人成忠女後三位貴子也後指送集

了内納と稱も右後等と新くし

日儀同之月と稱せらるるをくもせし

祢ハ東漢延平元年鄧鴻より
 神よりとよする 好漢書鄧鴻傳
 らん 唐の同存儀同之日と文教官
 の才一初ふさとし 位小死而これ 位一任平あ 祢多
 給りて身のしきくせんさる人せ任を
 たりし伊用云の祢ハ其志よあつと帰
 洛の好日大佐とて 千戸封せり也
 多きとも大佐の濶ハせき努めぬこ
 ろへり 知大改官するハ 大佐のさうて大佐
 の職ハつと先 伊用云の儀同之日大佐
 ありて大佐の職ハ那さぬ也 位世久我 大改大佐後

まして大佐の初大佐は唐の儀同之日と祢せりハ
 初大佐は唐の儀同之日と祢せりハ

大細言云紀

祢の言は絶て久しぬぬの世とあはるるに程皮し也
 振遺集系 大是寺小人くまろり
 りふふあふふ祢ハ見てふみゆり
 洛洛の大是寺ハ洛洛上より洛洛在ふ
 祢ハ見しとそれ洛洛也まろり祢後をゆ
 せまひしと今ハ祢ハ絶て其跡のしゆ
 とんてかの祢のあ言いあして久く也

多れとそのうし名もかりつる名のし社
今よ云はき入てまゝにやむやうとよよと
ひりよやむらと受けたり 拾遺 集より
断のいともゆり 絶ての洞よりいり あせと
一その振るをもゆりまきい

○大覚寺ハ二代実原云貞観十八年
正月以清涼院為大覚寺又云勅曰宜
随大后清涼天皇皇女御礼物類曰大
覚寺 とき赤澤 ちつ大覚寺の断をこそ
あせふら今ふり断は断のふらふらり
云何々同時の今乃 振まかくゆりまのえ

らせし断りるも断のあとも行あうそ水の
断ららうらるし或説又け時断るもふ
振ふふいりし 西ひ集ふ断の断及の
ふも田院ふふ断れてあせふらふぬと
すてんふまうらてきい け時あふふゆ
うりてん

護

祖父清慎云安礼父廉美云れた
母之品中務々代ゆ祝五女を任々
寛弘六年之月権大納言呼同九年院三業正

二位以安元年正月兼按察使
四年十二月致仕
長父二年正月
薨
祔四條大納言
兼諸記
云郷神位

和泉式部

あさうんけ世の外乃さひ紫今うてさひ乃あさうんけ
後拾遺集云...
以人のりさふはう...
やまひおし...
いさや今うてさひ...
あまさんふ...
あさうんけ...
あさうん

あさうんけ世の外乃さひ紫今うてさひ乃あさうんけ
後拾遺集云...
以人のりさふはう...
やまひおし...
いさや今うてさひ...
あまさんふ...
あさうんけ...
あさうん

と云ふ河に万葉集ありと云ふ久しく存在する
河在つると在りて在る不現とよきこ
のけせの外に美事なり

このひでといふはよみものありを
ふあひひあて母のむしうもな
そしとてせせこのむしうもな
し今の信乃らあつてのむしうもな
らとよもあつてのむしうもな
このむしうもあつてのむしうもな

善

父大江雅致母越中守保衡女昌子内親王乳母
上东门院女房一修院后和泉守橋貞
道妻故よ和泉式部とよとら松達
集結よいつとらゆらかきつとら
文あり或はるる又後丹後守保昌よ
あよとらとら今をよ集結よ
よ初め柳宮冷泉院の柳まつらほよ
る式部お流ち流とふく

十部

先づあひてみやられどもこゝろまふせ徳のふれ月日
新古今集 報 多く ちり ^首あひあひる
あちふゆる人の幸ひへてちりあひあひる
日のあて七月十日は月ふさうひて功り
ゆりりせり

月又競ひて二月の無ふあてとみゆされ
としふるあ集 女信廣庭に 兒等之 イニナ 道 ヤイ 差 サマ ち
トナキ 遠 トナキ 鳥 トナキ 野 トナキ 于 トナキ 王 トナキ 乃 トナキ 夜 ヨ 渡 ワタル 月 ツキ 尔 ニ 競 マキ 敢 マシ 六
鴨 カモ け ケ ぬ ヌ 海 ウミ 道 ミチ ち チ 道 ミチ ち チ 夜 ヨ の 月 ツキ 尔 ニ 競 マキ て マシ け ケ ぬ

秋月い入て道わぬらんさうんとこさうせり
くく馬ゆめの乳して十日の月入ち程
ふ其人ともあれ月ふさひてま
なる形多し 但そ隠れぬとあはれぬ
入ちといらんさう振ふゆると河ちのぬ
さあなるこ世はぬるそとゆるいさうか
見定あかすらぬさう十日の月入ま
ていあけとやいらんされといまこ秋の
短ねふいとこそをとぬく 入ゆるさうせ
故ふ奇ふ電つちあしりふも月のこよ入る
いひひて申さぬとて電うたぬるあ

例よらふあはらゆるり 勢いしなるる
登し 今の音男のこころれはるよあうて
却て女はりよれよらるやねとよあは
らけさくらいんともあひをさる
用ねさるに古流ふくつけけ流をく
とあはらるるふらねる
流もゆき

いん料りよるる世あるあけいとん
つげらり河は流るるもあはらる
みめさるの甲斐のあはらるる

集より移入るる

護

父藤原宣孝母崇武部大藏成章
妻也名又大武と云ふ之位は一條
院の清乳母なるあはけ位と叙せり
よるる或部の女はけかすしゆら
宗亮あはらるる

赤深 ちかづ

やうしてねえまーお伊小ね文のいじまての月成りね

坊指送(集) 中園白 道隆 少将 2 月

ルかとも

天徳二年十月十一日 任九少将三年三月二十五日下
貞元二年二月七日 後四位下 今日 停少将

う人ふおんおとらう けりりらあのみんてこ

さういふつとえんて 女に代りてまら

中園白いせんふ出

こころかろい見牙姉妹少て 昭如共ニさるる文

中二同母少て ころすこ 是れ母少ていけい

ちかるとま

いこのえてい ちかるとまのいおひのれを

いおねおふり即ちあうのいおまを

ちかるとまのいおまのいおまのいおま

おねおまのいおまのいおまのいおま

らひおまのいおまのいおまのいおま

かろいおまのいおまのいおまのいおま

いおまのいおまのいおまのいおま

いおまのいおまのいおまのいおま

いおまのいおまのいおまのいおま

いおまのいおまのいおまのいおま

いおまのいおまのいおまのいおま

るゆ記をよみし由袋子のよ云村周周依ち三つ尉
号橋つこもゆらど一と橋つたの文れと
しちふ申関白及義人がおぼゆる時とあま
ハ系融院天延二年より貞元へのゆき
のゆきとして其年中條少もゆりるま一とこと
あまよと條院也和元年又ま匡衡卒
してはたなよりうらうらとよ又奉国のよ
うませつる付毎條の條匡衡のその上よのゆん
まももみそくねとらまれしうはま崔
院長久二年のゆきけはつらゆら
りんかの業花相ゆり定法と業まゆ

みしゆのゆに百二とすは本終るゆしけね
け人のゆらゆらひらゆらゆらゆら
の安藤為幸りりりゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

の十とゆに丹後守ゆらゆらゆら
申れ又ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆら又丹後の任もゆらゆらゆらゆら
匡衡ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

はるるうしふにつゝあゝゆきとさう あまきき

云けしとは初名式アウ方と論してさうしけのちちみ あはれ

やといそてゆきととんじちるは あはれ

く小ぢぢれい あはれ

の大江奉周和泉の位を あはれ

多を あはれ

と あはれ

と あはれ

病 あはれ

を あはれ

あ あはれ

ら あはれ

う あはれ

し あはれ

中 あはれ

小式部内侍

大江山く此の道れ あはれ

金葉集 雜

和泉式 あはれ

子佐郡良方有速石里中有長大
崎長二千二百二十九丈廣九丈
二尺是名天橋立

譜

父和泉守橋道真母和泉式部也
小式部ハ母の長女也次て小式部と云
る也 上東つ院の女身人 常も御
ふらけぬの取中於公成の子らみてせしむ
と云らるる 昔より先太三系國に在り又て先は八幡山石府に在り
この侍内侍り小尚侍典侍常侍ありと云
る也 是の侍と出日侍小式部と云るは
かしのりまらしは と云と下り

此の侍内侍り小尚侍典侍常侍ありと云
る也 昔より先太三系國に在り又て先は八幡山石府に在り
かしのりまらしは と云と下り

日竹月宮姫とすしし
に橋朝臣 神代卷 葛城王の母縣大
養宿祢之千代太夫人は初銅え
年又橋のまよと姓まか あら 天平八年又此の
王は橋の姓と揚るより起り 續日本紀万葉
姓氏録等

伊勢方大輔

いづれ人の形々の形に金輪ふれをふくひぬるれ
河花集巻一 一條院の時時々の金輪を
人のとありける甚をり西前よりけりこれいそを
いそてきりうあといそとまこれい 伊勢方大輔
好の人のれをいそとていそせりいそあれいそ
あまよよとていそいそいそいそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

さふせふあつたふらるぬるの形乃ハ花集のふ
けれをの思乃清まふふとていそいそいそいそ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

時かたはあつたふらるぬるの形乃ハ花集のふ
いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

ねことあつたふらるぬるの形乃ハ花集のふ
は拾遺集

けにそこの形々の形に金輪ふれをふくひぬるれ
の外よりいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

此の如きニモ...
ニホロノ...
イハリ

うらり又むり...
のよりの...
の如く...
ふ人の...
とよ...
とよ...

譜

祖父祭主大中臣能宣朝臣父祭主輔視朝臣

也 諸物... 成須... 伊勢...

傷の... 伊勢...

大輔... 伊勢...

の名... 伊勢...

あ... 伊勢...

あ... 伊勢...

ひ... 伊勢...

河... 伊勢...

書... 伊勢...

うらみ入らむひらしてまてらうんらと
るれと又いせさふとまら入ありきまの偏
こかろゆい流海まらうてまらうて留よき
小松よ保され和泉武アともあねの舞
ももふれああらるふあ守そこいせめ
大怖と留あぐー

清少納言

夜にきてまのまねらう海まの世まの坂の園のゆき
法拾遺集 新 ち細きりまゆ波こして

ゆりりちまの口の清ゆあふふのねいとして

馬屋山 清少納言

り物あせせまふまの時代まのちまのあ夜のふり時まふまの
まふまのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの
まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの
まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの

あまのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの

まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの

まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの
まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの
まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの
まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの

まのまふまのまのまふまのまのまふまのまのまふまの

花子母のやうにけ
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは

花子母のやうにけ
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは
 うわすたかたまは

おらん ひとり人かむ(か)にむふれ候ひを
 なぬあいにむ(む)にむのひとむむとむむのむ
 茶のふちむ(む)に却てあむむむむ(む)

さうあむむ(む)のむあくむむむ(む)のむ
 しさけむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 渾はけむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

函谷のこむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 お坂の園こむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

おさむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 候(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 とむ(む)函谷園あむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

おむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 のむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 におむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

おむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 人のふれむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

こ既おむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 めこむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

こよあむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 まふ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

おむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)
 めむ(む)む(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)にむ(む)

しゆいとしりふに書せる河に万よ集り

悔^{イロシトメ}處^{カフキトルテフ}女^{ワスレカヒ}潜^ヨ取^モ云^モ志^モ具^{ワスレ}代^モニ^モ毛^モ不^{ワスレ}

忘^ス妹^{イモ}之^カ光^カ儀^シ者^ハ又^ハ

洗^ハ波^ハ根^ハ乃^ハ伊^イ波^ハ毛^モ多^ト由^ユ良^ラ尔^ニ我^ワ家^カ能^ニ

於^ニ毛^モ岐^キ尔^ニ久^ク尔^ニ毛^モ多^ト由^ユ良^ラ尔^ニ我^ワ家^カ能^ニ

伊^イ波^ハ集^ル尔^ニ今^イハ^ハあ^ハの^ハ人^ニを^シよ^シふ^シと^シハ^ハ

行^ルれ^シの^ハよ^シ又^ハよ^シふ^シを^シね^シと^シハ^ハ

ん^ハけ^ハ外^ニと^シ多^クふ^シ河^ニを^シと^シハ^ハ

の^ハよ^シの^ハよ^シね^ハ後^ニ撰^ル集^ル尔^ニ流^ルハ^ハ

天^ノの^ハよ^シの^ハよ^シあ^ハく^ハと^シひ^ハね^ハと^シし^ハつ^ハの^ハよ^シの^ハよ^シ

譜

父^ノ清^ノ原^ノ元^ノ輔^ノ即^チ枕^ノ妻^ノの^ハみ^ハら^ハ或^ハ説^ハ

け^ハあ^ハを^シま^ハえ^ハと^シと^シま^ハよ^シ如^クさ^ハい^ハあ^ハの^ハ流^ル

を^シし^ハほ^ハふ^ハ遠^クい^ハふ^ハら^ハし^ハ人^ノの^ハい^ハふ^ハよ^シの^ハよ^シ

ゆ^ハら^ハそれ^ト定^ルら^ハる^ハゆ^ハら^ハん^ハ流^ル神^ノ云^ハ老^ノの^ハ好^ク

四^ノ画^ノの^ハ流^ルよ^シあ^ハら^ハあ^ハい^ハつ^ハる^ハり^ハと^シ續^クあ^ハ疾^ク

集^ル難^クふ^ハの^ハ好^クゆ^ハら^ハわ^ハて^ハゆ^ハら^ハる^ハと^シ人^ノの^ハ

ゆ^ハら^ハま^ハて^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハ

同^ノ人^ノの^ハよ^シの^ハよ^シと^シい^ハふ^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハゆ^ハら^ハる^ハ

さふられの影のきふらりたりはなほ一
今もあつたるものいふにさういふはなほなほと
しねいけ考とらなほ

のほいけ考とらなほ
せしめとさういふとさういふにさういふ
あつたはなほのいふにさういふとさういふ
さういふとさういふとさういふとさういふ
あつたはなほのいふにさういふとさういふ
さういふとさういふとさういふとさういふ

花鳥文道雅

今いふとさういふとさういふとさういふ

花拾遺集とさういふとさういふとさういふ
乃ほいけ考とらなほ

さういふとさういふとさういふとさういふ
さういふとさういふとさういふとさういふ

さういふとさういふとさういふとさういふ
さういふとさういふとさういふとさういふ

中納言定頼

船のついでにのほろり船の細代女
の歌集をうらまへし海らてゆく時
荒道の川をいづれもあはれに
船のついでにのほろり船の細代女
の歌集をうらまへし海らてゆく時
荒道の川をいづれもあはれに
船のついでにのほろり船の細代女
の歌集をうらまへし海らてゆく時
荒道の川をいづれもあはれに

あつちの舟のついでにのほろり船の細代女
の歌集をうらまへし海らてゆく時
荒道の川をいづれもあはれに
船のついでにのほろり船の細代女
の歌集をうらまへし海らてゆく時
荒道の川をいづれもあはれに

十二月二十日 貞之 万葉集卷之
江也 氷奥細代者一処始九月至
中納言定頼

人子乃品
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃

譜

父公 任 卿母 昭平親王女定頼
長元二年任 推中納言 同十年叙
從二位長久三年正二位同出
年致仕 明年 寬徳二 正月 薨 加

一公の神位
兼諸記

の 後拾遺集千載集よの程乃ある
補任よの也と程とんさる

相模

のらしむびはあ 神ふもぬ公あよらさん名社信ん
拾遺集 志 永承六年 後冷 内裏寄合

小 勝相模 辰合 永承六年 正月 上 倉上 倉合 五番 尾
な 倉合 辰合 永承六年 正月 上 倉上 倉合 五番 尾
な 倉合 辰合 永承六年 正月 上 倉上 倉合 五番 尾
な 倉合 辰合 永承六年 正月 上 倉上 倉合 五番 尾

あきまほくをー ニニクハハハハハハ
ヤクモ命ハマモトコノハハハハハハハハハハ

譜

父源頼光頼信之袋まよ云者大江云
資妻云資者相模守依之号相模
中名乙侍従 入道一宗
妻女侍 後拾遺集歌云
大江公資相模守之侍りり多時りり
ふのあまりてまねちうあてゆるりり
らとよま(り)ことかかわてりりとまて
きーるーとつかし

あはれの愛ふか通うねとんし
又曰集あま云資の頼信小相くして侍りり
かこいぬふ歌ふるれもゆのぬ
さうみといよいりらうまーけ
二年弘徽皇后御令ましたの
まふまふまの人の

大徳正始

あまもふ表とあま山極花よりあふ知人も
金葉集新し大まもそあひりけと極の端り

こちしひ入のりい世はゆたき然れおん心
より入候頃とりよ役少角然れおん心
神一に甚な山と大地とよみ人の入り
まうこふ候磯の聖家を仰より
あし神しくりゆと連綿して芳洲をり
入候室中興^真くけ時等の定るてこい
并畧又或ぬふま入始役小角然れおん
あふ門十候十候十候十候向十
地等是ぬき芳洲と虫右順と奉也芳洲
入候逆と云^{聖室} 磯^磯 磯^磯 磯^磯 磯^磯 磯^磯
ぬきよりあふつよふとて磯 逆子と云

聖室以下皆逆奉也に別まよ入と
花付ト云云 梅の候に記すたつ
信治賢之月ありよ山嶽系の指述
しとに月あるよゆらうしと記すたつ
けお七之月の末に月の神のたつと記す

譜

父参議基平、^院一條也号平等院信正
并保安四年補定曆与座主天仁二年五月任
大信正初為慈光三山掾校山伏
修驗道事保延元年乙卯二月五日

入滅 中石記水昌
記善委之

後世に於て云々

宰相基子と云々其ハ小一條院の御子
基子の子ハ基子と云々其ハ小一條院の御子
基子の女御と云々其ハ小一條院の御子
其ハ子と云々其ハ小一條院の御子
と云々其ハ小一條院の御子

周防内侍

去のねれり先ける白物に於て

千載集 雜上 三十一 月のあるは

後を人しゆきと云々

内侍周防よりして

物ありぬと云々

あしは物ありと云々

てゆりしと云々

去のよれはと云々

のこんはと云々

けしと云々

と云々

と云々

と云々

とくも時をりひ入てゆりけとぬくはゆりけ
介うるを—— ぬる河まふりけくはゆりけ
さるるぬこ

或説小ひうはふそ入らとと人うととふ法
ゆりけゆりぬぬ又いとえうをうてまふふ
河ををい月わやうふぬとゆととさるるを
床音のまふふぬいひまひまひぬぬまひ
あくわまうう ぬぬまひまひまひまひ
たひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ

ゆりいふまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ
まひまひまひまひまひまひまひまひまひ

譜

父周防守平純仲 大系四云葛原
親王七世孫 或抄

冷泉院女房白河院女房 作者堀河

まひらんし山分らうしせまふしむい法
記帳ししみしあれとうふに共はむのふん
と

譜

皇考冷泉院 皇妣昭 皇太后藤原
氏超子太政大臣 院居貞 定弘八年十
元月即位 長和五年正月 讓位 寛仁
四年四月 依 涉 愍 乙 亥 九月 九日
山内御之條 院四十百孫粉 羊花おれふ

能因法師

つれづれのさのふのよららむき回のふの海しり

好捨造集秋下、水兼四年門裏今念ふ海、
らまの山に於田川の氷之小あれ、其山のねふる花
のそ、いなるなとて、本ては川の海とらりたること
即説よか、こり、おまらふとて、こらよ、はは、おまらふとて、
世のの、こらとらとら、い、例の、海とらり
ま田川みら、い、海とらひの、い、あ、の、山、の、ま、あ、ら、り
ま田川おまら、い、海とら、い、海とら、い、海とら、い、海とら、い
とら、い、海とら、い、海とら、い、海とら、い、海とら、い、海とら、い
う中ふよ、念、風、吹、氷、と、い、ひ、し、ふ、海、こ、ら、と、ら、り
ま、い、そ、り、ふ、ほ、ふ、か、い、の、地、い、ゆ、り、け、い、ら、ふ、ま、ら
ま、い、ゆ、り、ふ、か、い、の、地、い、ゆ、り、け、い、ら、ふ、ま、ら
こら、い、ゆ、り、ふ、か、い、の、地、い、ゆ、り、け、い、ら、ふ、ま、ら

花さ川のふらふら流るる水さだむはせらうあふむはらふ。雷岳
と神岳といひてふる布部はも雷岳といふ也此は玉史
の確も記はぬらう川の昔は藤原は流るるは又下集は
まねるひのうさのての昔は花さ川のといふなり
ほふあさ川といひてなする人。一。三田川に三田山の
わしふまはて平部族さといふ布部はらうと部を
とるもて流るる細いありて川の流すも人から
くさ山ののふらふは流るるふらふも。一。入る地を
うくたしとさうらうまらる。又ささ
林部をひいてて三田川を流るるも。一。の
流るるも。一。は京は也

花さ川のふらふら流るる水さだむはせらうあふむはらふ。雷岳
と神岳といひてふる布部はも雷岳といふ也此は玉史
の確も記はぬらう川の昔は藤原は流るるは又下集は
まねるひのうさのての昔は花さ川のといふなり
ほふあさ川といひてなする人。一。三田川に三田山の
わしふまはて平部族さといふ布部はらうと部を
とるもて流るる細いありて川の流すも人から
くさ山ののふらふは流るるふらふも。一。入る地を
うくたしとさうらうまらる。又ささ
林部をひいてて三田川を流るるも。一。の
流るるも。一。は京は也

あまのつみ(か)にとわくわくわたりて三田川に水さ
さしてあまもわたりてあまのつみにきりて流るる
たふ。あまも三田川に流るる。一。とわかれ
ともあまもわたりてあまのつみにきりて流るる
みじかに三田川のあまもあまのつみにきりて流るる
の色は三田といふあまもあまのつみにきりて流るる
言ふもあまもあまのつみにきりて流るる三田川に
三田といふもあまもあまのつみにきりて流るる
してあまも九ふ。白色の三田の山に流るるのささ
の山ともあまのつみにきりて流るるといふあま
とわくの川のささ。一。あまもあまのつみにきりて流るる
神史に三田といふ。あまもあまのつみにきりて流るる

よき

いづれの指のまふぬけは伊勢のうごきぬ
か(か)いふは(い)い

長還法師

いづれの指のまふぬけは伊勢のうごきぬ
好松遺集 秋上 歌
古今集 七言小 雑わてあまのくさきまゆら
せんまふはふいそきまもくはふく
秋の夕(宿)も若も 場わくらの新さよき

改行のあはれは...
か(か)いふは(い)い

やそまふはふいそきまもくはふく
新さよき
改行のあはれは...
か(か)いふは(い)い

譜

先祖 石洋 大系 小佐りりり
いづれ 同集 永永 六年 辰 乙の 根合

の介がくはもせに鉄固まじり御の人の
武州は平右の麻衣まらりてふしとふぶあうとむん
としてみまらるるの神するといふといふ
後ゆいけはのちには作をいふまのいそと入て
そのあひられねのまをそのまといふといふ
おろろあひられねのまをそのまといふといふ
おろろあひられねのまをそのまといふといふ

大宛言経信

夕さらけに門田の稲系糸吉行て其のまの
金糸集秋 俾賢経の梅作のいふ
人くまらうて田家秋也といふ
秋これのちいれとよまらけに門田の梅作

しきききききききききききききききききき
さ海さじりの介れまのまのまのまのまのまの
おろろあひられねのまをそのまといふといふ
い夕さらけに門田の稲系糸吉行て其のまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
とふあひにるは糸集又一雨出之在者といふ
そ又まさらけいと唱あをまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
又糸集糸集又春まら者 春まら者
夕またあまをいふは皆倍倍のまのまのまのまの
といふといふ説に法いり且あせよといふまの

しつとみし人ゆきとちがふは係とさし
物もさうしうも好撰集の河をよみ
たりとこと本(末)とさしと文とよみと
ふり(書)也(し)

口田とさし田里のあし口(あ)やと回され(口)口
編本の比乃こさあ(口)けれ(口)な(口)夕(口)の(口)あ
し(口)ゆ(口)け(口)し(口)と(口)あ(口)る(口)

口あ(口)の(口)ま(口)ら(口)や(口)口(口)あ(口)れ(口)る(口)全(口)判(口)を(口)ら(口)う(口)る(口)地(口)と
洲(口)せ(口)る(口)小(口)治(口)河(口)の(口)ま(口)ら(口)う(口)る(口)地(口)と(口)し(口)て(口)も(口)口(口)田(口)の(口)あ(口)り(口)て
ま(口)ら(口)今(口)の(口)あ(口)ら(口)れ(口)る(口)地(口)と(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て
こ(口)ら(口)う(口)る(口)地(口)と(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て

あ(口)の(口)ま(口)ら(口)や(口)口(口)あ(口)れ(口)る(口)全(口)判(口)を(口)ら(口)う(口)る(口)地(口)と
ま(口)ら(口)今(口)の(口)あ(口)ら(口)れ(口)る(口)地(口)と(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て
あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て
て(口)ら(口)う(口)る(口)地(口)と(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て
今(口)の(口)あ(口)ら(口)れ(口)る(口)地(口)と(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て
あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て
と(口)ら(口)う(口)る(口)地(口)と(口)あ(口)ら(口)ぬ(口)を(口)あ(口)り(口)て

譜

源氏社文六傳院ちるに
道方口 経佐口 兼保 四年 正二位

信 義 権 申 御 言

承保三年 権大納言 寛治
五年 大納言 八年 六月 大宰
権師 嘉保三年 国正月 薨於西府

八十二以上
云々補任

祐子内親王家紀伊

若小うとあうの候はあふぬかひかや社のおりとはとれ

金葉集ホ云 堀河院の時 権中合小あ

物事合ふ云 門あて 名上の人し 名よむとああ小

あづ人の人く のおと小 けさうのちよみてやと

作しとてさし

あまのいしよあれ

あまのいしよあれ

あまのいしよあれ

あまのいしよあれ

あまのいしよあれ

あまのいしよあれ

あまのいしよあれ

西よりして漢もそのの
ぐりもともあはれと
るこゝにいと人よる

高師俊和泉持統紀よ
大鳥郡脚海延喜社名式
高師社大鳥郡とみ
和泉出のり海時
れは沖津波高師の俊

譜

祐子内親王海皇女也後世
継子中宮子のうら

祐子内親王皇延喜二年四月廿二
日延喜二年四月廿二
小正のわ
紀伊の父集平
方女紀伊守皇妹瑞原也依号
紀伊
の家とよ治令よ一
二正家枝子

真汝何ふは
百官公卿
下層官有太子率
更家合註張
曰太子種家合
本朝親王種家合
是之

前中納言匡房

さゆの尻上乃極 遠より外山の暮とて 唯らん

後拾遺集 去上 くられおひきまらさみ 後二條

白作 道 の家よ人へ 酒さるばる 弁よみ約るに 遠小

山の極状をこし ありあはる

彼もあはるまふ 孝小極の 暮るは 中ふし こと

あつたふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

あつたふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

白丸小 暮るは ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし ことふし

いねのあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 此のあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 つくしあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 と入ていふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 昔とつるあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 古史記下雄略天皇つゞき山又のあつるをいふなりし
 一言の神回しあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 一云彼時百其自所向之山尾登山上人
 是よけよのあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 能波理能延陀とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし

こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし
 こと山外山とあつるをいふはあつるをいふなりしあつるをいふなりし

謹
 始祀大江音人 千古 延喜伊 延喜伊
 特 天徳中 齋光 永延彦 延喜伊 延喜伊
 納言 齋光 永延彦 延喜伊 延喜伊
 衡 匡房とけりら 乙巳補任世絶又、匡衡々
 匡房々々 定延八年 振中納言 永

長二年兼左衛門督
年権帥解任叙正二位
再遷任権帥天永二年任大亮
同日十一月亮七十一公郷補任
けおよハ大に匡身致れとあれ
後人のとるべき事

源俊賴朝臣
千載集卷三拾中細言後思家

の弁渡りりる時不遂意
いよしく人のとらぬ事
一首をくく事と在る
人の心の通らぬ事
いん料の事ありと
よしの船に宿はよと

すまじしう多しとて中へ結造り集
福をばまゝにけさうと初てゆりう女の
と人のまてゆりれ... 高宗を結たかむね
ころあいらの結は結人のあに結むすにせ
やそけふふちて修れ結はよまれらるとも
世に相傳りてとてまじり

の結伸云は結ふを結初るも結を初より
結よりとて今まの結はよおふし一修の
結をいささこれに結は初るもあはれ
なはははぬまへに結の結は結を
一條とゆりらるる今まの結

初つた結も結初るも結を初より
けうははてするまへに結を初る
結は初るも結を初るも結を初る
結は初るも結を初るも結を初る
結は初るも結を初るも結を初る
結は初るも結を初るも結を初る

護

又大細言経信に... 信れ結は...
本上頭或者九京大又を結は...
上結諸物結増ぬしけ結はとてまじりらるる
結は初るも結を初るも結を初る

ことごとく... 九月... 十月... 十一月...
 九月... 十月... 十一月...
 十二月... 正月... 二月...
 三月... 四月... 五月...
 六月... 七月... 八月...
 九月... 十月... 十一月...
 十二月... 正月... 二月...

九月... 十月... 十一月...
 十二月... 正月... 二月...
 三月... 四月... 五月...
 六月... 七月... 八月...
 九月... 十月... 十一月...
 十二月... 正月... 二月...

九月... 十月... 十一月...
 十二月... 正月... 二月...
 三月... 四月... 五月...
 六月... 七月... 八月...
 九月... 十月... 十一月...
 十二月... 正月... 二月...

山治寺

山城山

山治寺 階神

鐘之取起

元明天皇和銅三年

續日本後記云

兼和六年十二月勅以經興福寺

御座會講所者宜為宮中寬勝會

講所自今以後永恆例

○延喜玄蕃式云興福寺御座會十

月十日始十六日訖其聽訖九月

中旬從細簡定先經藤原氏長者定

之

○撰集抄云興福寺の御座會の儀は延喜式に依りて

法會のり講所を八宗の住持の在りて撰

集し其の儀は延喜式に依りて撰

集し其の儀は延喜式に依りて撰

集し其の儀は延喜式に依りて撰

集し其の儀は延喜式に依りて撰

譜

社父堀川右大臣頼宗父正二位右

大臣俊家基俊母從五位下尼

衛門佐也

○後世は御座會の基俊前代より一々地守

順葉業尾 高橋大とすえしりとの腹もあがり

りんその尻らゆりあがりみゆり

台記并一云
根政作云

比年基俊原俊西入道入滅了天之
七文哀哉言詩之帝已愼

かろの人れ五位をてやしひし

をふらうくハ亡又ハ別けたとちうのゆき基俊と申ける
人このともかゝ束の世のつらふまふあはれをよまふ
ゆきひねらう 今あまふまふあはれをよまふ
つさハ口あまふまふあはれをよまふ
こよひはれまふまふあはれをよまふ
るいふのゆきまふまふあはれをよまふ
つらんとてしひまふまふあはれをよまふ
るらん人まで海まふまふあはれをよまふ



